

美術随想 (11)

特別展について

大和文華館々長 石澤 正男

1965年、ニューヨークで開催された万国博覧会にイタリア政府はレオナルド・ダ・ヴィンチと並んでイタリア・ルネサンスを代表する巨匠ミケランジェロ(1475~1564)作の最も有名なローマのサン・ピエトロ堂内に安置されている大理石造「ピエタ」(Pietà, 敬虔な同情を意味するイタリア語で、キリスト教美術では一般に聖母マリアが死せるキリストを膝に抱きかかえて悲嘆しているところを彫刻または絵画等に表現したものをいう。写真参照)を出品しました。この大吉報を知ったアメリカ市民は驚喜してその到来を鶴首待ち続けていました。万博当局としては「ピエタ」に殺到する大観衆をどうして受け容れるかに頭を悩まし、結局しっかりしたベルトコンベヤーを設備することに決定しました。万博が開かれると予想どおり大観衆が「ピエタ」を見に集まりましたが、観衆はみなコンベヤーに乗せられて、コンベヤーの移動するままだに「ピエタ」に近づき、その正面を通りすぎると、ゆっくり名残を惜しむ間もなくコンベヤーからおろされてしまいます。「ピエタ」の前に跪いて敬虔なお祈りを捧げたいと思ってきた人々は跪くどころか、立ったままであつという間にその場から遠ざけられてしまうわけです。

この話を聞いた時、いかにもアメリカ人らしい大観衆のさばき方ではあると思いますが、しかし一方では、キリスト教徒ではなくても巨匠ミケランジェロが心血を注いで作った「ピエタ」をあまりにも見世物扱いにしてしまった感じがして、味気ない思いを禁じえませんでした。そもそもミケラン

ジェロの「ピエタ」のような高度の宗教芸術を概して世俗的な雰囲気支配する万博会場に出品すること自体に問題があると思います



が、それはともかくとして、ニューヨークの万博当局は、入場者のだれもが短い時間でも、とにかく親しく巨匠の原作に接しうようと考えて実施した手段に違いありません。

日本で行われる特別展のうちには余りにも厚い群衆の壁にさえぎ

られて身動きも容易でなく、汗だくになって群衆の末端らしいところにたどりついて、人々の動きは一センチ刻みとは言わぬまでも非

常に緩慢で、辛抱強く待っていると四方からこぼれたりして、段々いらいらした気持になります。そういう自分自身に気がついて、こんなことではとても美術を鑑賞できる心境ではないと思い、あっさり見るのを諦めて、ひしめきあっている雑踏から逃げ出すことがよくあ

ります。私なぞは半世紀以上の長い間に天下の名品として定評のある美術・工芸の作品の大多数を拝見する機会を与えられてきましたから、前述のような場合に黒山の人垣に囲まれている陳列ケースの中にある作品を以前に見ていることが多いので、割にあっさり諦めることができるのかも知れません。しかし名品ともなれば何度でも見たいのは私たちでも他の人々と大差はないと思います。もちろんまだ一度も見ることのない人々にとっては、その機会を逸してはいつ見られるか判らないのですから、どんなに長く待たされようが忍耐強く人垣についてゆけば必ず原作の前に立つことができるのですから、悪戦苦闘は覚悟の上のことでしょう。しかしそんなままでして漸く目ざす作品の前にたどりついて人波にこぼかれ、押し流されて、ゆっくり鑑賞するどころではなく、抵抗しがたい人垣に押しまわられて、いやおうなしに原作の前から遠ざけられ、また別の雑踏の渦巻の中に投げ込まれてしまわなければなりません。こんなことならむしろベルトコンベヤーに乗せられて一定の速度で作品の前を次々と通る方がましではないか。ニューヨーク万博当局がミケランジェロの「ピエタ」のためにベルトコンベヤーを用意したのを一笑にふしてしまうのは少し軽卒かも知れない。ふとそんなことを一昨年春京都国立博物館が読売新聞社と共同主催で開催した「国宝展」の会場の大混雑ぶりを見て思い出したのでした。

これから次号にかけて大規模な国・公立の博物館・美術館の主催する特別展を中心に、それに関連する問題点について少し私見を述べてみたいと思います。(つづく、78.6.8)

季刊 美のたより No.43

昭和53年7月1日

発行 大和文華館